

随想

随想

勘定侍

柳生真劍勝負

(株)P P Q C 研究所 加藤 宏光

三年ぶりで中国へ行つてきた。コロナ騒動で三年間何もできなかったため、「とりあえず、現場や業界がどうなっているか」を見るためであった。

マスコミが立てている悪評と現実とはあまりにも異なり、あざんとさせられることが多かったのであるが、それは今回の、テーマではない。帰りの空路での時間つぶしに『勘定侍 柳生真劍勝負一〜六』を読んだ。

著者は上田秀人で、彼の時代小説は、その時代背景や設定が個性的であり、またストーリーの流れが極めて面白い。

これまでも、この作家による幾つもの時代小説シリーズを読んできたが、どの作品も、これまでの時代小説とは異なる視点でおのおのの時代を見

ている。

かねてから、小説家の才能には舌を巻く。まず時代背景をくまなく調べ、小説の舞台となつてゐるその時を駆け抜けた人々の生きざまや、生活環境、経済的背景と身分差が織り成す、その時だからこそある絡み合いが織り成す網の目に、明らかとなつてゐる史実を前提として、過去だからこそ分らない部分に、ストーリーをはめ込み、押し込み、組み合わせる納得できるストーリーを作り上げている。

もちろん、荒唐無稽な小説もある。かつての柴田錬三郎による『大衆時代小説』等は、登場人物たち全員が架空であり、ストーリーの流れは時任せ、条件にも時代考証等が感じられなかったものである。

この小説の主人公は武家の血を引きながら、商家で商人として育てられた淡海一夜(おみかずや)が、武家の代表たる柳生家で算盤を武器として、快刀乱麻の活躍をするのである。

著者の感心するところは、この作家の知識の広さとともに、その深さが驚くほどであることである。

例えとして、ストーリーを追う中にある記述を挙げてみるれば、

①経営は時の移りに合わせて、前向きに開発・発展することが必須。現状維持では必ず衰退・滅亡への道を歩む

②商品には、日常の用を足すために必須のモノと非日常のアイテムがある。非日常のモノにはそれに応じた価格設定が、毎日の生活に必要なモノは、生活維持を妨げない価格設定が必要

③品質や値打ちに相応した価格を認めない相手は、商売の相手ではない

④一くくりにされる商品に、少しでも品質の劣るモノが含まれれば、全体の評価は、低

著者が小学生から中学二年生くらいまで好んで読んでいた時代小説には、実際に存在した、ある程度時代背景がわかっている『曾我兄弟の仇討ち物語』『岩見重太郎のヒヒ退治』『堀部安兵衛の仇討ち物語』『真田十勇士』等々がそれらに当たる。江戸時代後期のSF物語『児雷也(注1)』を元にして、焼き直した小説も子ども心を弾ませたものである。

歴史を考証し、史実の歴史上の人物の生涯をなぞりながら、史実を踏まえて書きつづる中に、人と人の絡み合いに作家の創造を踏まえた架空を織り込んで書くスタイルは、司馬遼太郎を代表とする『時代小説』である。著者が三〇歳の頃にのめり込んだ『燃えよ剣(注2)』等は、詳細に調

い一部の価格と判断される

といった内容である。

このような事実、生産と販売の世界では共通の真理である。わが業界でも、同様に通じる観念でありこれを外せば、経営を維持できない。

しかし、この作家(上田秀人氏)はそもそも、歯科医師であり、その後、時代小説作家へ転身した、と紹介されている。そのような経歴の作家が、経済と経営の根幹を踏まえて、さまざまなエピソードを創作し、史実として存在した過去の人物像(一人ではない、相当数の登場人物)を想定して、それらの相互関係に整合性を取りながら、場面・場面のエピソードを組み合わせて、真らしい展開を進めていく。氏は、こうした作品を複数同時に書き進めているようであり、その膨大なポテンシャルに、つくづく感服してしまう。

氏の作品には、幕末近いころを舞台とした幾つもの小説シリーズがあり、それぞれに大いに面白い関心点がある。その中でも、この作品は一

べた史実を紹介しながら、人と人の絡み合いを時の流れに添わせて書き上げ、悲壮な環境の下に死に行く主人公の心の奥を描き、読む者を自然に作者の想定へ落とし込んで行き、共感させる。

かつての名監督・黒澤明によつて描かれた『七人の侍』は、現代わかつてゐる戦国時代とは設定に相当のズレがあるが、あの映画の刷り込みにより『戦国時代の身分制度』が『士農工商』と固く縛られている、という誤解が長く続いたことを思つても、歴史作家の影響を改めて認識させられる。

今回取り上げた『勘定侍 柳生真劍勝負』は、徳川三代將軍家光のころ、柳生新陰流をもつて家光に仕えた剣術指南役『柳生宗矩』が戦場で行き

風変わった味を楽しめたモノとして、ここに取り上げてみた。

注1 作者は戯作者の美図垣笑顔(みずがき えがお)。

注2 江戸時代後期の天保一〇年(一八三九年)から明治元年(一八六八年)にかけて和泉屋市兵衛から刊行され続けた。四三編からなる長編の合巻作品。作者は四代にわたり、美図垣笑顔・一筆庵(浮世絵師の溪斎英泉)・柳下亭種員・柳水亭種清の順で書き継がれていった。挿絵は歌川国貞ら浮世絵師等、計七人が担当している。

注2 新選組副長・土方歳三の生涯を描いた司馬遼太郎の歴史小説。不良少年「バラガキ」から始まり、箱館戦争で戦死するまで、戦いに明け暮れる生き様を「喧嘩師」と形容した男の障害を書ききった。校正の新選組像に強い影響を与え続けている。

ずりの商家の娘の一度の結び付きで生まれた男子を二一年間忘却の彼方へ置きながら、柳生家が六〇〇〇石の旗本から一万石の大名に引き上げられたことから、すでに傾きかけている家計を立て直し大名として立ち行くように、内政を変えねばならなくなる物語。そこで宗矩は二〇年以上無視していた商家で育っている己の隠し子をあえて自家へ呼び戻そうとするところから始まり、六巻仕立ての小説としてまとめられたものである。

上田秀人という小説家は、一九五九年大阪に生まれ、当初は歯科医師を生業としていた。一九九七年に『身代わり吉衛門』という小説を嚆矢とし二〇〇一年から本格的に小説家として活躍を始めた。

彼の自己紹介によれば、歴史作家としては先人たちの緻密に網羅された分野と競り合うのは避けて、これまで目を向けられていなかった、いわば歴史の狭間に焦点を絞り、巷間に生きる人々の生活をテーマとして書く、としている。